四国大学文学部書道文化学科

第36回

教員展

ごあいさつ

四国大学文学部書道文化学科は、「書道に親しむ」から「書道を楽しむ」、さらに「書道を活かす」へと発展させ、書道文化の専門的探求を目指すユニークな学科です。

学生たちは、書道の「技術」「歴史」「理論」などを探求していく中で書道文化を理解し、また書の作品制作を通して自己を表現し、新たなことを創造する力を身につけていきます。本学科では、学生と教員が一丸となって元気に活動していることが特色です。学生が身につけた力は書道以外の分野でも応用範囲が広く、卒業後には様々な職業の中でそれを生かし活躍しています。

私たち教員も、教育と研究の責務を果たすべく日々取り組んでいます。この展覧会は、学科の専任と非常勤の教員が書法研究発表の場として年一回開催し、今年で36回目を迎えました。

時節柄、コロナ禍に対応した鑑賞法をお願いしております。また大学ＨＰでの発表とこのパンフレット送付によって、学外の多くの皆様にも鑑賞していただきたく存じます。なにとぞ御高覧のうえ、御教示賜りますようお願い申し上げます。

（出品者一同）

【学内展】（今年度は交流プラザ展はなし）

会期　令和４年８月２日（火）～８月20日（土）　9：00～18：00
（但し、６・７日、11～16日は休館）

場所　四国大学　書道文化館１Ｆギャラリー（徳島市応神町古川）

主催　四国大学 学際融合研究所 言語文化研究部門

（題字揮毫：辻　尚子、　背景：西から見た書道文化館）

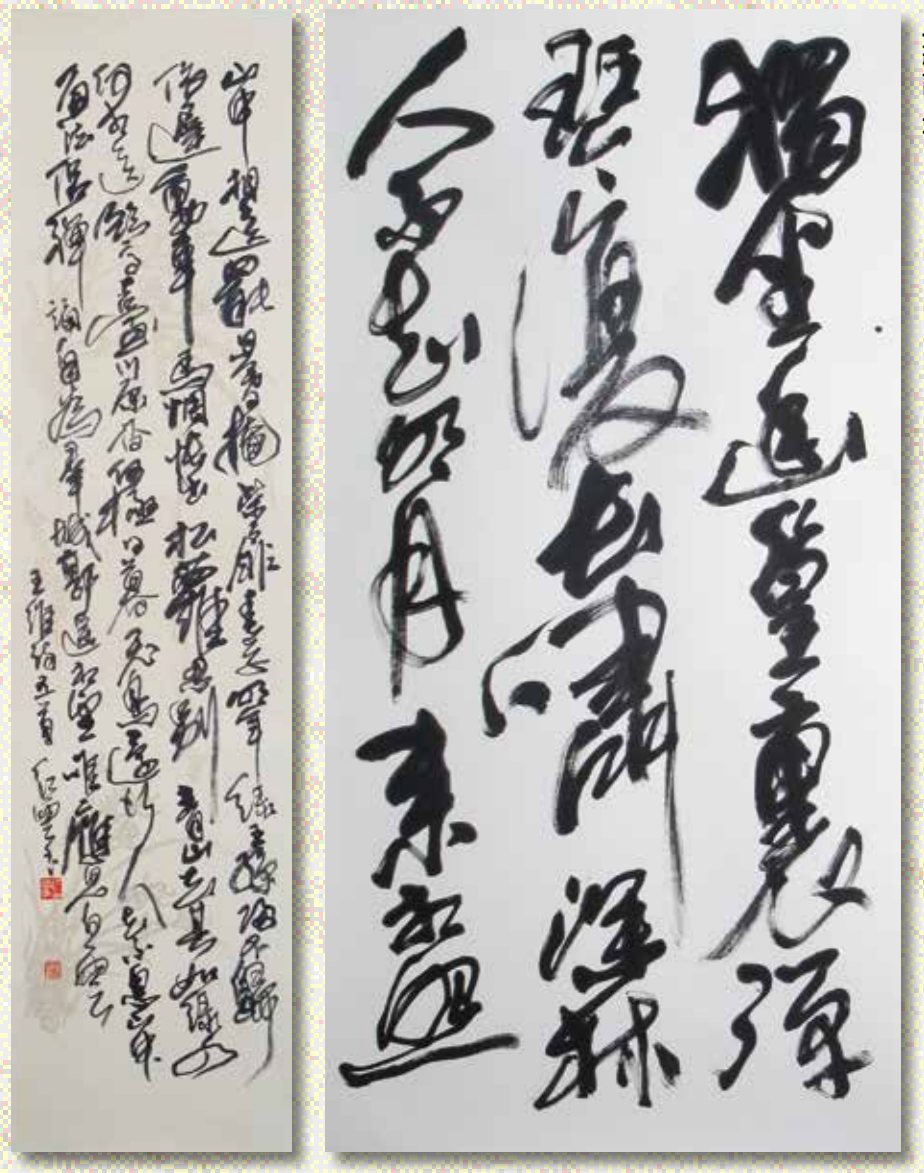
「静」

太田剛（仙鳩）

143×75

辻（つじ）　尚子（たかこ）（紅雲（こううん））

王維詩五首



135×110

獨坐幽篁裏彈琴復長嘯深林人不知明月來相照
山中相送罷日暮掩柴扉春草明年緑王孫歸不歸
依遲動車馬惆悵出松蘿忍別青山去其如緑水何
相送臨高臺川原杳何極日暮飛鳥還行人去不息
山中多法侶禪誦自爲羣城郭遥相望唯應見白雲

梶井基次郎「桜の木の下には」の一節

53×225

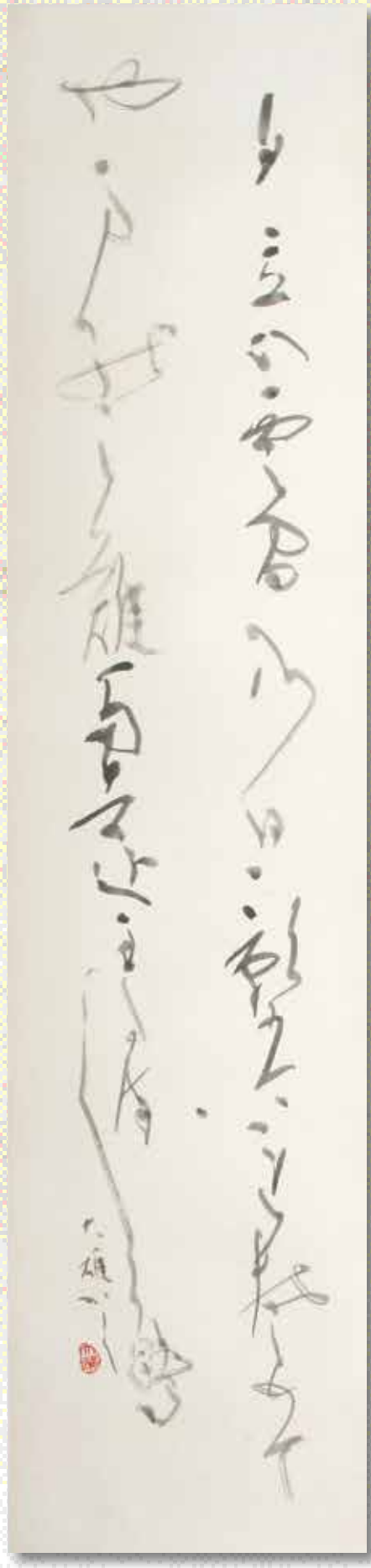
森（もり）上（かみ）洋（ひろ）光（みつ）（洋光（ようこう））

「奮揚」

240×90

田ノ岡（たのおか） 大雄（だいゆう）

「白鷺」（藤原定家の歌）



225×55

夕立の雲間の日影はれそめて山のこなたをわたる白鷺

渡邉周一（星舫）

「鑿窗啓牖」

5.2×5.2

「鳥得辞籠不擇林」

5.5×5.5

「周濟」

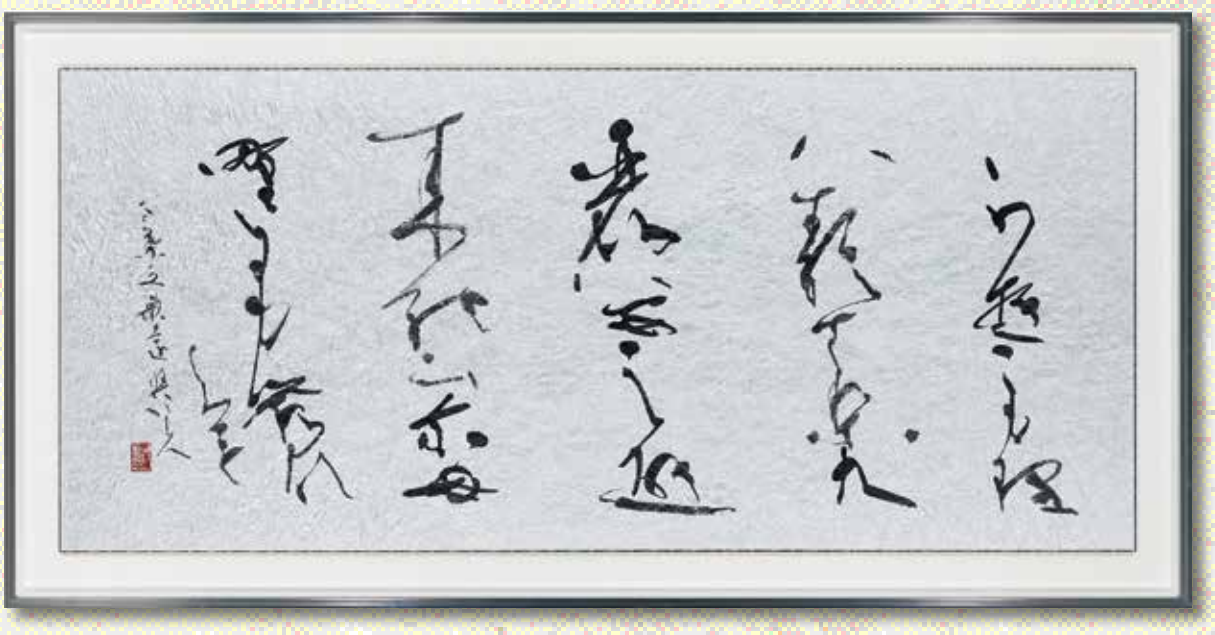
5.5×5.5

「周能」

5.3×5.3

黒田賢一

「冬こもり」（『万葉集』より）



本紙 80×180

ふゆこもり
はるさりくれば
あしひきの
山にも野にも
鴬なくも

上田普

「沈黙」

95×94

鹿倉壮史（碩斎）

「風従虎」（『易経』より）

136×35

黒木知之（くろき ともゆき）

文与可畫竹胸有成竹　鄭板橋畫竹胸無成竹　濃淡疎密　短長肥瘦　隨手寫去
自爾成局其神理具足也　貌茲後学何敢妄擬前賢　然有成竹無成竹　其實只是一個道理　（鄭板橋詩）

「竹石図」

135×35

小竹正高

「傘」（新沢としひこ詩）

34×24

松村茂樹

「長尾雨山對近代中日美術交流的貢獻結尾一段」

32.5×22.3

【口語訳】

長尾雨山は、『缶翁墨戯』序文中で、呉昌碩を画家とせず、清朝の遺民、上海に隠棲する高士、詩人としている。これにより雨山は呉昌碩の書画がその余技であることを強調し、画を以って論じようとしなかったのである。序文中にはさらに呉昌碩の為人、吟詠など文人の一面が多く描かれている。そこから雨山が呉昌碩の書画、文人の本質を見抜き、理解していたことがわかる。中国画の改良が時代の潮流となっていた近代中国画壇にあって、雨山はずっと呉昌碩の文人気質を重んじ、その絵画の本質を日本に伝えることに努め、さらには米国にも伝えたのである。

「長尾雨山對近代中日美術交流的貢獻」結びの一節。

四国大学教員展の為に、栄宝斎信箋を用いて書いた。

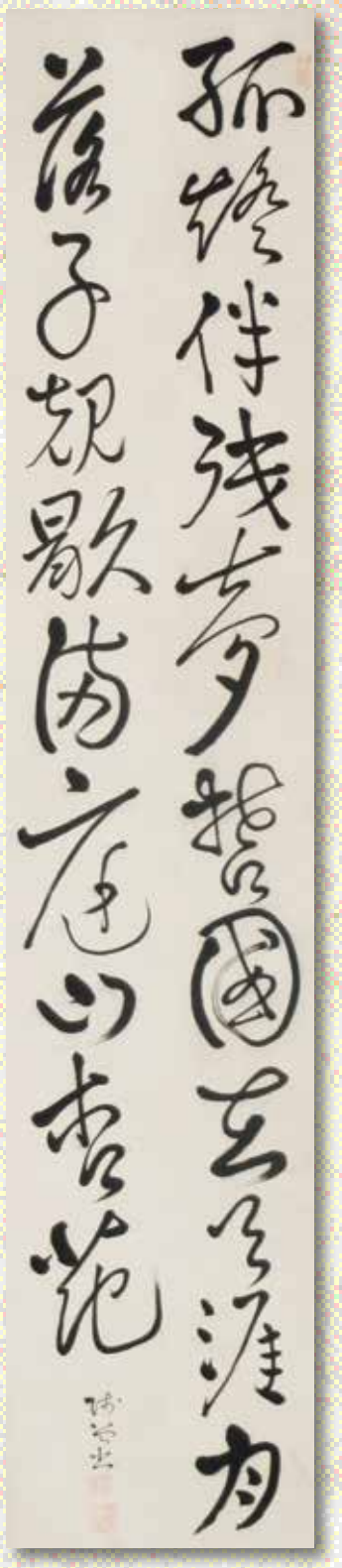
松村茂樹

【阿波ゆかりの書人作品　紙上展】

四国大学　書道文化センターでは、近世から近代にかけての阿波と淡路に関係の深い書人の作品を中心に収集しています。この時代の地方の書道を担った学者・僧侶・文人たちは、既に名前を忘れられていることが多いのですが、書の技術は高く個性的で、近世・近代の日本書道史を考える時の重要な資料になります。また、その流れは現代のその地域の人々の書く書の基礎的な部分を形成していると考えられます。行草の漢文や変体仮名の作品が多いので、現代人には読みにくく、経年劣化も目立つため、ともすれば世代交代の折に廃棄される危険があります。翻刻はまだ間に合っておりませんが、教員展の際に、書人の履歴と共にその一部を展示し、地域の皆様や学生達にも鑑賞をしていただくことで、書人の名前を記憶に留め、次代に伝えていきたいと考えています。

那波魯堂（なわろどう）　享保十二～寛政元（１７２７～８９）六十三歳

播州姫路の農家に生まれた。名は師曾、字は孝卿、通称は主膳、別号は鉄硯道人。弟元継と共に大阪に出て古学派の岡白駒に学んだ。四年後に師と共に京都に出て二十五歳で塾を開いた。聖護院宮忠譽法親王に召されて侍講となり、寺域に家塾を開いた。西山拙斎・菅茶山などが入門し、頼春水が出入りした。ここで朱子学に転向し、阿波に移ってからもそれを強く主張したので「四国正学」と呼ばれた。宝暦十四年（１７６４）の朝鮮通信使を大阪で応接し、さらに江戸まで同行。道中の筆談で互いに唱和し新知識を吸収した。使節は魯堂を日東儒学第一人と称し、魯堂はこの時の様子を『東遊篇』に著した。安永七年（１７７８）五十二歳の時京住みの阿波藩儒合田如玉の推挙で蜂須賀家に仕え、徳島に移った。資性脱俗風采をかまわず、飄逸自適した。書は常に古法帖を学び、草書に妙を得た。また詩を得意とした。門下の那波網川が養嗣子となって阿波藩儒を継いだ。

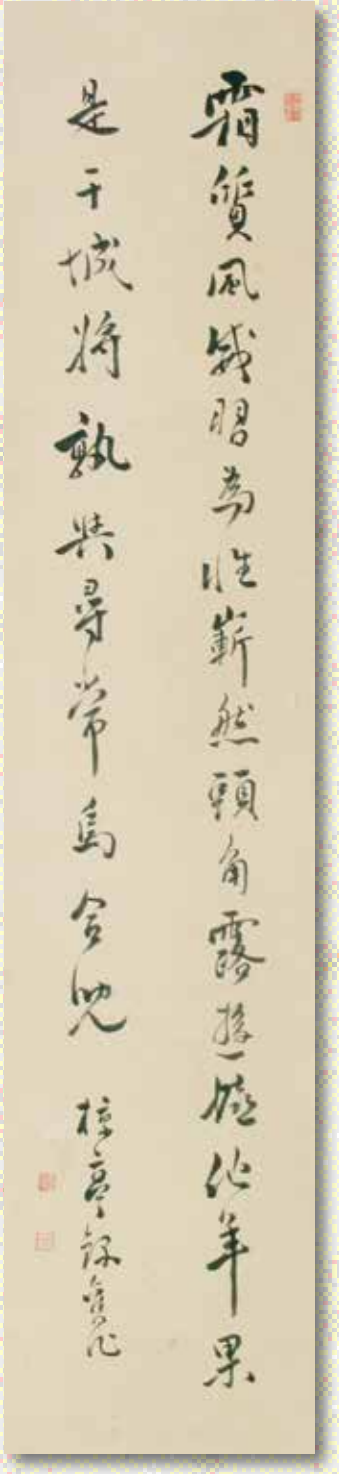


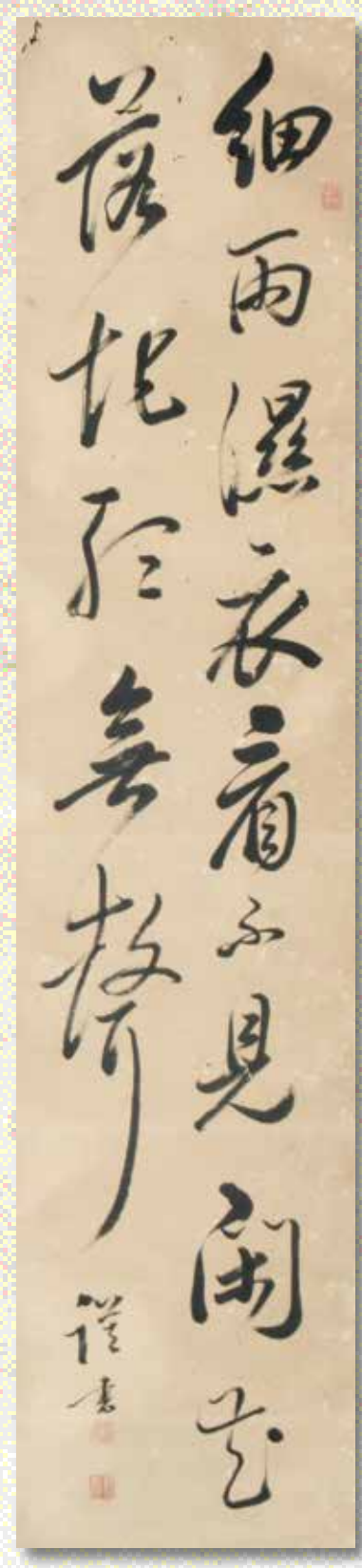
鉄復堂（てつふくどう）　安永六～天保十四（１７７７～１８４３）六十七歳

阿波名東郡上佐奈河内村の農家の出であった父が徳島に出て阿波藩の掃除役となり、その三男として生まれた。名は顕考・煥、字は子文、別号は芳渓・渭洲・高亭、通称は嘉三・嘉蔵。幼時は八木巽所に学び、長じて那波網川の門に入った。また増田衡亭に従って江戸に行き、古賀精里の学僕として学んだ。学成って、加賀藩より招かれたが、父の病気と、父が他藩に仕えるのを反対し辞退して帰国し、徳島の常三島、のち下助任村に塾を開いて教えた。門下に四十宮石田・岩本贅庵・阿部椋亭・新居水竹・若山勿堂・黒田東園・久次米邦樹ら多くの人材があった。文政十三年（１８３０）より苗字帯刀を許された。天保年間、姫路侯に招かれ、経書を藩学仁寿館に教えた。しかし、仕官せずに一月余りで帰国。阿波藩主斉昌は司読に登用しようとしたが、柴野碧海の下風に立つのを好まず、辞退して町儒のまま、貧窮の中に死去した。余技として、時に水墨の山水を描いたという。

阿部椋亭（あべりょうてい）　天明七～明治三（１７８７～１８７０）八十四歳

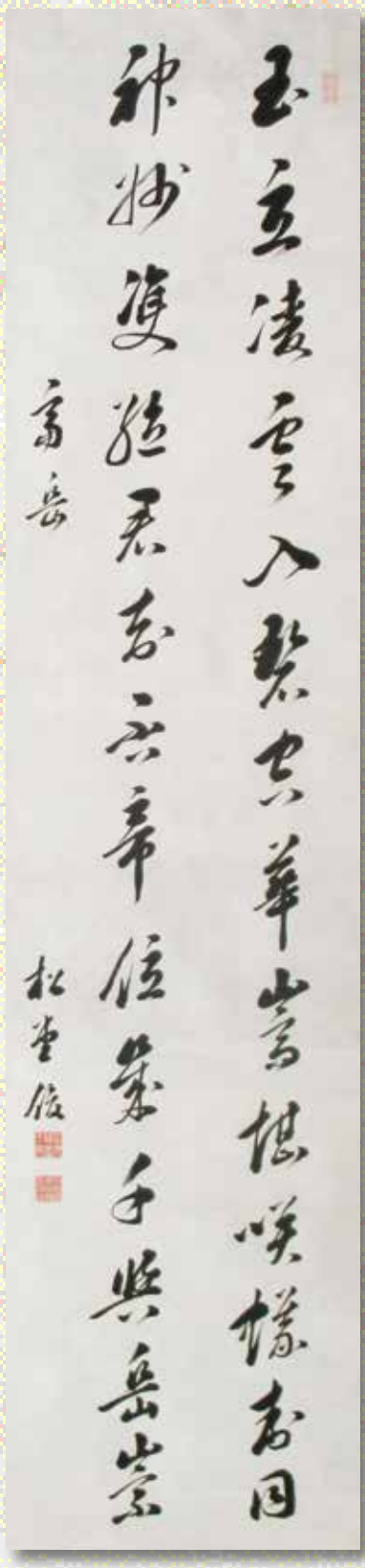
阿波郡粟島村（現・阿波市市場町）の人。名は憲、諱は成夫、通称は亀三郎。家職は庄屋。はじめ石黒篁渓、のちに鉄復堂に学び、経史に通暁した。在村五十四年、民政に治績があり郷士となり卍字章服を賜い、名字帯刀を許された。人となり謹直寛容であった。詩書に優れ、俳諧を楽しんだ。





新居春洋（にいしゅんよう）　寛政四～天保九（１７９２～１８３８）四十七歳

徳島冨田浦の人。名は謨、字は子彰、通称は米之丞。居宅は双清堂。はじめ武知洗堂に学び、後に柴野碧海に詩を学んだ。書は趙帖を習い、後に阿波藩主に従って江戸に行き、薩摩の本田香雪に学んで一家を成した。息子が新居水竹。



岡久松堂（おかひさしょうどう）　天保十三～大正二（１８４２～１９１３）七十二歳

徳島佐古の人。名は俊、通称は俊吉、字は子英。岡久桂堂の長子。父に経史・百家の書を学び、家学を継ぎ、また詩書を嗜んだ。

出　品　目　録

太　田　　剛（仙鳩）〈教授〉

「静」

「自然」（浅沼益男の句）

「阿耨多羅三藐三菩提」

辻　　尚　子（紅雲）〈教授〉

王維詩五首

「桜の木の下には」の一節（梶井基次郎）

森　上　洋　光（洋光）〈教授〉

「奮揚」

田ノ岡　大　雄〈常勤講師〉

「白鷺」（藤原定家の歌）

「十文字」（向井去来の句）

「夏氷」（山口誓子の句）

渡　邉　周　一（星舫）〈常勤講師〉

「鑿窗啓牖　鳥得辞籠不擇林」
（『論衡』・白居易の詩）

「蓬壺　熾肆」（『捨遺記』・『唐書』）

「周濟　書素懐」（『易経』『顔氏家訓』）

「長厚清修　周能」（『趙朴』・『淮南子』）

黒　田　賢　一〈客員教授〉

「冬こもり」（『万葉集』より）

上　田　　普〈講師〉

「沈黙」

鹿　倉　壮　史（碩斎）〈講師〉

「風従虎」（『易経』より）

黒　木　知　之〈講師〉

「竹石図」（画賛は鄭板橋の詩）

小　竹　正　高〈講師〉

「傘」（新沢としひこの詩）

松　村　茂　樹〈講師〉

「長尾雨山對近代中日美術交流的貢獻
結尾一段」（自作漢文）

〒771−1192　徳島市応神町古川
四国大学
学際融合研究所　言語文化研究部門
TEL　088(665)1300
FAX　088(665)8037
ホームページ
https://www.shikoku-u.ac.jp/education/gakusai-yugo-labo/lc-dep/